

Fine名誉会員からのメッセージ 「不妊」を考える

Fineの仲間と出会い、「Fine名誉会員」というありがたいポジションをいただいている私です。Fineには「不妊」というKeywordを軸に多くのチャレンジャー、卒業生がつどい、よりよい“Quality of life”を求める広場があることに幸せを感じます。“今”の私たちから“次”の人たちへ“何か”を届けることができれば、と願います。

さて、「不妊」について、ここで私の思いを述べてみたいと思います。その前に自身のヒストリーを復習するならば、2000年に40歳にして初婚。当然、世間より年齢的に出遅れているので、即「妊活」をスタート。流れは、国会議員であろうと、普通の女性と全く同じ。違う点は、「卵管閉塞」が早期の検査で分かったので「人工授精」はパスしました。結局、約5年の治療期間の中で、顕微授精、アシステッドハッチング等、全てのメニューをこなし、計14回の体外受精。ちなみに、1回妊娠9週目で流産、他、数回の化学流産を経験しました。自分で言うのも何ですが、堂々たる「不妊戦士」の一人だと思えます。

その後、訳あって夫と別れたのち、シングルの人でありましたが、子どもと出会い家族を築きたいという思いが強く「養子」の道を模索しましたが、ドアは完全に閉鎖されていました。一番の理由は「年齢」と「有職」です。これは現在の不妊夫婦にとっても同じハンデになるのは、言うまでもないことでしょう。現在(12月)、私は新しいパートナーと出会い、米国での「卵子提供」による体外受精によ

り人生初めて妊産婦となりました。この件について物議を醸したことは事実です。否定的な声もたくさんありました。私自身もこれが「おすすめ」ということではありません。

しかし、「不妊治療」というのは「子どもと出会うための努力」と置きかえるのであれば、様々なチョイスが私たちの前にあって良いのでは。ましてや、他の国々では容認されていて、日本でできない明確な根拠も知らされないままでは、と思います。段階的に言えば、海外では「不妊治療」には必ずゴールがあるのです。

「自然妊娠」→「タイミング」→「人工授精」→「体外受精」→「卵子提供」or「代理母」→「養子」。

日本ではその途中の踊り場「体外受精」で留め置かれ、不要な治療を強いられて何年も何10回も苦しんでいる患者が、あまりに多いのです。

最後に、私も皆さんと同じ不妊治療体験を持つ一人として、これからも皆さんと共に悩みを共有し、共に歩いていけたらと願っております。

Fine名誉会員について

NPO法人Fineでは、不妊体験を通して不妊や不妊治療の啓発に貢献された方に名誉会員の称号を贈呈しています。名誉会員第1号は、野田聖子議員(2004年)、第2号・第3号はジャガー横田さん・木下博勝さんご夫妻(2008年)です。いずれも、私たち当事者に元気と勇気を与えてくださいました。

* Fine名誉会員への推薦がありましたら、Fineにお知らせください。



衆議院議員 **野田聖子**

